

輝水会琵琶公演
二月十八日夕四時半東京日本橋第一証券ビル。売花翁、磯崎凌精、西山錦耕、重衡、辺見錦舟、静、利田錦葉、白虎隊、浪江錦正、松、仲川秀邦、横笛、伊藤錦貴、肩をもむ、都錦穂、西行、輝錦統、吉野山懐古、松田静水、羅生門、原島旭粧、宮武旭豊、押田旭、窮、鉢の木、金森錦凌、二〇三高地、藤巻旭、西郷隆盛、前田秋声、敦盛、鶴田錦史。外に祝大鼓一番。

荻野甲水氏入洛歓迎会
錦心流一水会東京本部顧問の同氏入洛を、二月二十七日昼一時から一水会京都支部主催の首記が京都東山仁王門の本妙寺で開催された。荻野氏は京都出身で馴染深い左記琵琶人が列席して久闊を温ため各自寸演のあと荻野氏の至芸一曲を聴き夕食を共にしながら懐旧談に花を咲かせて七時半解散した。(出席者)馬場鴨水、多賀帯水、梅原旭濤、牧雨水、古谷寛水、木下皇水、水内煥水、植村寛水。

道明寺奉納演奏会
菅公御神退千七十五周年大祭が二月二十七日昼河内国道明寺で営まれ大阪琵琶同好会の協賛で左記の通り奉納盛會であった。敦盛、花旭秋、石田三成、水谷旭甫、井伊大老、辻旭城、菅公、石橋旭嶺、伊豆の御難、中山鳳水、伏見の吹雪、天津八千代。外に詩吟舞、日舞等十三題。

テレビで琵琶放映
三月三日(内)午後三時富士テレビ(関西テレビ)「三時のあなた」で約四十分間女優扇千景さんが司会して「凛冽の美声!」かくれた琵琶仙人入冬の沈黙を破る!」の標題で、東京

から汽車三時間バス二時間、徒歩四キロといふ人里離れた山間僻地福島県川内村に隠棲の錦心流琵琶樋口主水氏(73)が、晴耕雨織の琵琶の醍醐味談の間を縫って「羽衣」「舟弁慶」「薄陽江」などの一節を鮮やかに演奏し最後に鶴田錦史氏も列席して対談に加わるなど、近時兎角沈滞気味の琵琶楽のPRに大いにプラスされたのは近頃の出色で誠に結構であった。

京都琵琶協会定例茶話会
三月十三日(日)昼一時本部平井春嶺氏宅。(次号詳報)
荻野甲水演奏大会
三月二十二日(火)昼二時東京上野本牧亭。錦心流名手多数応援出演。(次号詳報)
ラヂオ琵琶放送
二月二十四日(休)夕五時NHK・FM。「あゝ八甲田山」浅野晴風、「別れの盃」山元旭錦両氏。
三月三日(休)夕五時NHK・FM。「仁科盛信」山下晴楓、「小敦盛」山本鶴声両氏。
三月十七日(休)夕五時NHK・FM。「井伊大老」村木桜柳女史。外に詩吟数題。

樋口主水氏
二月十八日新潟医大附属病院に於て心筋梗塞のため逝去、享年七十二。医学博士、耳鼻咽喉科の権威で、大正十四年畑関水氏に師事して錦心流の奥儀を極め、一水会新潟支部長としてその剛快な演奏振りは一水会新潟支部謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る。

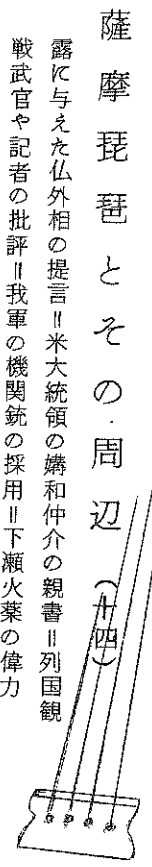
樋口主水氏
二月十八日新潟医大附属病院に於て心筋梗塞のため逝去、享年七十二。医学博士、耳鼻咽喉科の権威で、大正十四年畑関水氏に師事して錦心流の奥儀を極め、一水会新潟支部長としてその剛快な演奏振りは一水会新潟支部謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る。

予告
旭濤会の温習会 四月三日(日)正午京都東山松原上ル安井金比羅宮会館。会主梅原旭濤女史。
京都琵琶協会四月定例茶話会 四月十日(日)一時平井春嶺氏宅。尚四月十五(金)、十六(土)の両日有馬温泉一泊旅行。
龍吟同人会四月例会 四月二十四日(日)一時東京新宿洲鳳会館。
各流派合同演奏大会 六月五日(日)正午京都丸丸夷川京都商工会議所三階大ホール。主催京都琵琶協会。筑前、錦心流の女流名手各一人ゲスト出演。

きかとあ
近年珍しい厳寒の冬が終つてようやく春を迎え何となく心がなごむ。関西では三月一日から十四日間厳修の奈良二月堂のお水とりが続いて近江の比良八荒(はっこう)が済むと春が来るとされている。これからは琵琶界も我が世の春を謳歌する。本号は各地新聞からの転載記事が三件あり些か面映ゆい感じがしないでもない。が、琵琶人の動勢や琵琶に関係のある記事を新聞紙上に取り上げているというところはそれだけ世間が琵琶といふものに関心を寄せて来たことを意味する。ラヂオ、テレビでの放送なども目を追って漸増しつつあり我々琵琶同好者にとつて嬉しく心強いと云わればならぬ。琵琶に関係のある記事を新聞雑誌などで御覧になったお方はその切り抜きを精々京紙社にお寄せ頂きたい。毎号連載の「我が道を行く六十五年」は執筆者西郷天風氏の都合で一、二回休載し近く稿を新たに再掲することになっている。御了承下さい。

樋口主水氏
二月十八日新潟医大附属病院に於て心筋梗塞のため逝去、享年七十二。医学博士、耳鼻咽喉科の権威で、大正十四年畑関水氏に師事して錦心流の奥儀を極め、一水会新潟支部長としてその剛快な演奏振りは一水会新潟支部謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る。

琵琶 京 結 第二七四号 京 絃 社



薩摩琵琶とその周辺 (九四)

露に与えた仏外相の提言、米大統領の購和仲介の親書、列国親戦武官や記者の批評、我軍の機関銃の採用、下瀬火薬の偉力

こゝで話を前に戻す。あの堅城鉄壁と称された旅順の陥落と旅順艦隊の敗北の報道は世界各国に多大なるショックを与えた。この思いもよらぬ悲報に、ロシア同盟国フランスの外相デルカッセは、「一つの重大なる提言をロシア側に与えている。」

「ロゼストウエンスキー艦隊は本国に引き返すべきであろう。それは彼の任務は旅順救援が目的で、この時点に於てバルチック艦隊の任務は終った」とある。

と同時に口提督の行動より推測して、昨年の十月十五日リバウの軍港を発航以来対島に至り、東郷と対決せる迄の時間は七か月半に及ぶ長日月、一体口提督は何を考えて斯くもノラリクラーリとやって来たのか、或は次から次と知らされるその悲報に極東航行は最早や空しきものと思つたのであろうか。

然し故で一番哀れなのは乗艦している一万二千の将兵である。遂次軍紀は紊れる。往く

のか帰るのか、士気は屯みに低下して来る。後述するが東郷元帥の直話集の中に

「彼口提督は徒らに狐疑逡巡して極東に着くのを遅らせてしまった。一日早ければ一日の利があつたであらう」とある。

この時点に於て、かねて親日家としての米ルーゾベルト大統領は、こころを以て兩國に購和の機会として親書を露ニコライ二世に送つたが、皇帝は「極東の一陣地旅順の陥落位で大ロシアが戦争を止めるなどとは以つての外である」と言つて、その親書を丸めて床に叩きつけたが、それより奉天の惨敗、バルチック艦隊の潰滅を知り、一方国内の革命運動がいよいよ熾烈を加える。かくして大統領の二回目の親書を駐露大使より受取つた皇帝陛下は「いと町重に『有難う』と言つて受取り、急速に日露の購和が開かれる。」

さて茲で日露戦争が終末を告げ、この戦争に参加せる列国の陸海観戦武官、新聞通信社

評論家等四十数氏の観戦の批評が間もなく発表されているが、その中から観戦者の観た奉天戦前に於ける日露両軍陣地の情景を二、三ひろつて見ると

◇米国軍医正シマン博士談「日本軍の医術の設備はその完全無欠なるに驚くばかり、之に反してロシアの設備は日本軍に比すべくもなく貧弱極まるものであった。ロシア本国より鉄路をもつて運ばれて来るものはその次も亦その次も醜業婦とウオッカにして、満洲の野は一大酒宴場と化し、酒と女と唄その腐蝕の原点に見れば勝敗の帰趨自ら判然たるものがある。」云々

◇英国新聞記者談「露軍の陣地には楽隊あり、毎晩にぎやかに楽を奏し、兵士は毎晩歌を唄つて浮かれていた。日本軍の陣地に行つて見ればそんなことはない。日本の兵士は戦いのない時は河流に魚を漁し、多くの兵士は郷里に手紙を書くことで、此の両者を比較すれば日本軍が勝つワケだと首肯されるであらう。」云々

◇海戦の方を目を転ずれば、あの大会戦が彼等の眼に映じたものは、東郷提督の命令下一糸乱れず、その砲術の卓抜なる真価を遺憾なく発揮されていた点に一致した見解である。その中より変つた二、三を見ると

◇英国海軍武官の談「口提督はその大艦隊の主砲を信じ、ただ漠然として対島に乗り入れた。通常陸海を問わず、偵察という戦術の初歩的のものを全く無視したことが重大

なる戦術の誤謬を犯し、敵の虚を衝くべきことを本国出航の当初よりやっていた。両艦隊主砲動員のクライマックスの十分間にしてもオスラビア、スワロフの浴びた砲弾の命中率は驚くべき適確なるもので、忽ちにして二艦は戦闘能力を破砕され、ロシア側の兵員の度胆を抜き去ってしまった。」(此項未完)云々

大阪夏の陣 (五)

山川流水



和歌山城攻撃を目指す大阪勢の大野主馬治房は、元和元年(一六一五)四月二十八日午後、堺に入った。前日、大和郡山の焼き討ちを終えた別働隊も本隊に合流していた。

「大日本史料」は、「大阪の将大野治房、横島玄蕃ら火を住吉、堺などに放ち、東軍水軍の将向井忠勝、九鬼嘉隆らと戦う」とし、この日夕四時ごろ大野治房の弟道犬の部隊が放火、町と屋敷を焼いて焦土と化した。向井将監忠勝が水軍を率いて海からこれを攻撃、激戦のうちに両軍とも負傷者を出し、日暮れて戦鬪はやんだ。向井忠勝も右胸に鉄砲きずを受けた。

「大日本史料」の大意は、堺の町は大阪から近いので、市民は初め秀頼の保護を受けて

いた。しかしこのころは大阪に大軍が居る一方、これと対立して家康の強い軍隊がある。その間にあって堺は両方の保護を受けようとした。

そこで、密使を家康に送り、大阪方が糧食や軍需品の徴発に来るので、その掠奪と暴行を防ぐため守備兵を派遣してほしい」と保護を求めた。堺は冬の陣でも同じ態度をとって両面外交が成功していたが、今度はバランスが崩れて完全に失敗した。密使の派遣が大阪方に露見したからである。

然し秀頼は半分は我慢して、東軍が来て堺の食糧や軍需物資を取らぬよう、その前に大阪城へ運び込ませようと考えて二千人の部隊を派遣した。その部隊が堺に入ると、既に東軍の部隊が来ていたので、直ちに大阪城に報告すると、大阪では怒って兵力を増派し、「堺の全市を処罰せよ」と命じた。斯くして堺に放火して大火災となった。繁華を誇った都市の痕跡も無くなり、この悲しむべき火事で二万の家を失い、巨費を投じた仏教寺院も多数焼失した。

この火災は夜になって大阪からも猛炎が見えた。治房の本隊はこの火災の明かりを利用して、暗夜の中を徹夜で南進したという。

「堺市史」によると、由緒の古い念仏寺も堺の天神として世に知られた常楽寺(菅原神社)、南宗寺、妙国寺その他数々の神社仏閣は灰と化した。戦災復興の都市計画の地割りも間もなく出来て、町家は比較的復興が早

かったが、歴とした寺院などの大建築は容易では無く、堺市街が完全に復旧したのは、大阪合戦終末後二、三十年後、としている。

人口七十万の現在の堺市北西の一部分、旧土居川に囲まれた地区が室町時代の自由都市以来の旧堺であった。市社界教育課では「記録が残っていないので夏の陣に焼失したのかどこからどこまで等は分からぬが、旧堺の北は神明町から南は寺地町までが焼けたのではなからうかと推定される。南北両端の町々には元和以前の重要文化財などが残っている」と云う。

大阪落城後大野道犬は姿をくらました。前に秀頼に仕え、冬の陣の直前から家康の家来に鞍替えしていた小林由兵衛が五月三十日、京都二條城へ行く途中大仏殿の茶店で道犬を見つけて友人と二人で逮捕、家康のもとへ連行した。これを聞いた堺の町人たちは訴えた。「堺の堂社仏閣や繁盛していた民家を道犬が焼いた。奈良の大仏を焼いた平重衡が私刑された例もあるので道犬を引渡されたい。」

お蔭で道犬は堺郊外の刑場並松で、町民が道犬を火あぶりにして恨みを晴らした。その後誰か建てたか「南無阿弥陀仏」と念仏を刻んで道犬の供養塔が出来た。

明治初年、刑場廃止とともに高さ約二米のその供養塔は、並松町から柳の町東二丁の月蔵寺に移された。日蓮宗の同寺にどうして念仏の塔が移されたのかは分からない。道犬の名も法名も刻んでないのは、徳川幕府に遠慮したのだろうか。

続。私の音楽ノート (三)

水藤五郎



全集のはなし(前)

最近では全集流行(はやり)であります。文学はもとより、音楽・美術・学術等の各分野で、おびただしい数の全集、若しくは、体系集が製作発行されました。この流行は、文学出版分野がその魁であり、その主流でもあ

るのが実状です。

而して、今日の全集化の波は、その利用者にとっては真に有難い出来事であると同時に、出版、レコードを中心とするマスコミ産業の商業主義に依って、弄れる危険をも併せ持っている様に考えられます。

一人の作家、音楽家等の芸術家を深く理解しうるには、長い年月にわたる、その芸術家の創作活動に於て、如何なる変遷が生じていったかを具さに見つける必要があり、その為には、全集は格好のものであります。一方全集と云う、大型形式の販売が、利潤回収には便利な手段であることも確かです。

この読者側の希望と、出版側の商魂が合致して、今日の全集ブームを生んだと申せましょう。と同時に、もう一つの現象が生まれま

す。昔では、街に見かけた小さな書店は姿を消し、或いはその姿を全く別のものとしたのでした。

古い觀念は、デパートでは、書店は流行なものときめていましたが、今日では、デパートの大フロアーが、書店の立地条件になります。つまり、広いスペースを取る全集の山を並べるために生じたことでした。街の書店では、二、三階を増築して、全集、シリーズを並べたてます。多くの人々が、この全集を取り揃えることに弄勞されています。つまり、我々は「全集」の言葉に弱く、甘い様であり、病氣と診断すれば「慢性全集病」であります。

では、全集は無意味かと云えば、決してそうではありません。その後世に与える効用は大きく、今ある「全集」「体系集」の全てが貴重であり、且つ、素晴らしいものであります。かく云う私も全集病であり、幾つかの全集を所有しています。茲に、それ等の一部を挙げてみることにしましょう。

書籍では、(一)夏目漱石全集(十六巻)、(二)山本周五郎全集(三十余巻)、(三)海音寺潮五郎全集(二十四巻)、(四)日本文学全集(六十巻)

レコードでは、(一)長唄芳村伊十郎全集、(二)等の柴(山田、生田の全集)、(三)世界名曲全集、(四)虎造全集、(五)円生全集……

今挙げた全集類は、過去十年余りの間に、私が乏しい経済をやりくりして取り揃えたものであり、青春の財産とも云えるものであり

ます。恥を話せば、新全集購入の為に、手放した全集もありました。涙を吞んで手放したと云いたい処ですが、捨てる苦痛以上に、入手全集の魅力を抱いてのことであつたわけですから。これ等の全集の中に、うずまる様にしての毎日の起伏とも云える私であります。が、この全集郡の全てに、目と耳を傾けることは至難の技であります。勿論、全集の主人公である作家、演奏家については、神とも師とも偉人とも崇拜している人々なのです。それらは己が怠慢として自戒しなければならぬものではあります。やはり至難です。

周五郎全集は、山本周五郎生存在中に、講談社から十二巻が出版されている、装幀の良い、なかなか立派な本でした。その価格も安価でありましたが、収録作品に限りがあり、この点では、新潮社の周五郎全集に一步を譲りました。四十年の死後、未収録作品が一つのシリーズでまたまた出版され、これは実業の日本社、朝日新聞社等から出て、私の本棚は、これ等の周五郎集で溢れました。

この混乱は、海音寺全集では、かなり改善されて、部厚い二十四巻に相当な作品が収められています。

他の文学全集はともかく、この二作家の全集を少しづつ読み比べるのが私の日課であり、飲酒家の晩酌の如きものとなっています。

長唄の伊十郎全集を、私は実質的には二度購入しました。全集は、全五十曲を二十四枚のレコードに録音してあり、美しい桐箱に収

められて、伊十郎師の自筆原本「道成寺」と全五十曲歌詞本の二冊が附加されています。師の自筆本は、芸を想起させるが如く、力強く堂々としたためられています。

しかし、五万余の高額な全集を購入し得なかった大学三年の私は、一枚一枚とレコードを買い求めていました。それは、今思えば涙ぐましい若き情熱であったのでした。



日本歴史に埋れた英雄 信州仁科五郎盛信をしのぶ

辻 旭 城

乗鞍岳の山奥深くに源を発する梓川は、多くの支流の水を集めながら上高地の大正池へと一旦注ぎ、更に安曇野へ下って犀川に合流する。この間約七十キロ、梓川の織りなす溪谷美は四季の変化に富み、我国でも有数の山岳美を誇る。

信州の安曇はこうした環境にあり、名門仁科上野介盛政が守護していたが、世継ぎがなく滅びかけたとき甲斐の武田信玄は、自分の五男盛信にあとを継がせ、盛信は仁科の姓を名乗ることとなったが、戦国時代の事として各地に英雄が割拠し、戦が絶え間なかった。

智略に富む信長は、先を見越して武田信玄と同盟を結んでいたが、侵略策略家の信玄は

天下統一のため上洛を狙い、同盟を破って徳川方を攻略したものの、雄図空しく天正元年(一五七三)四月十二日、伊那の駒場で病死し、武田家は勝頼の代となった。勝頼も度々出陣したが何れも失敗して勢力は次第に衰えた。勝頼を狙うのは織田信長、徳川家康、それに駿河の北條氏政である。

勝頼は天正九年新府に築城してこれに移り、織田方の進攻に備えて盛信を伊那高遠の守将にするなどこれに対処したが、天正十年二月武田一族の木曾義昌が勝頼に背いて信長に通じ、武田方の形勢は最悪となった。信長は木曾谷を義昌軍に北上させ、長男信忠を信濃に派して伊那口を攻め上らせた。織田軍を迎える武田方は武運拙なく各地で破れ、諏訪に布陣していた総帥勝頼は甲斐に引上げた。

織田軍の大將信忠は、高遠城にある盛信に降伏を促す書面を送ったところ、盛信は「当城には不義臆病者なし」とこれに応じず、士気は仲々盛んであったので、やむなく信忠は進軍をはじめ、先鋒は天正十年三月高遠に到着し、一日未明城を包囲攻撃を開始した。籠城の盛信以下は大奮戦をしたが、多勢に小勢で数日後に落城した。

全員は杜絶な最後をとげた。盛信は「やおれ信忠よつく承われ、高遠城主仁科五郎盛信今や武運つきて潔きよく腹を斬る。切腹とはこうするものぞ。」と、寄せ来る敵に大音声で呼びかけ、名刀虎徹で腹十文字にかき切つて自らの腹わたをつかみ出し、敵兵目かけて

投げつけて十九才の若い命を絶った。

盛信の首は、美濃国久渡に兵を進めていた信長のもとに送られて首実見の後長良河原にさらされた。

一方高遠城を陥した織田信忠は急進撃を続け、三日後に諏訪に到着、新府に退却した勝頼以下は都留郡岩殿に寄ろうとして城に火を放ち敗退した。信忠は勝に乗じて七日甲府に至り、三月十一日には敗退の勝頼、信勝父子は遂に自刃、武田方は滅亡した。

高遠落城の際、籠城諸兵の華々しい最期はいたく里人たちの心を打った。戦後、盛信以下重なる人々の屍を収めて、三峯川を隔てた五郎山に懸るに葬ったと伝えられている。



安珍・清姫物語

志賀

鐘に恨みは数々ござる 初夜の鐘をつくときは 諸業無情と響くなり 後夜(ごや)の鐘をつく時は 是生滅法(ぜしやうめつぽう)と響くなり 晨鐘(じんじやう)の響きは生滅滅已(しやうめつめつ)の響きは生入り あるいは 寂滅為楽(じやくめつがらく)と響くなり 聞いて驚く人もなし われも後生の雲晴れて 真如の

月を眺め明かさん……。

毎年四月二十七日には、道成寺で鐘供養が行われる。道成寺は和歌山県御坊市にある天台宗の寺で、天音山千手院という。

延長六年八月、奥州の若い美男の僧安珍が修業の旅に出て、この附近の真砂(まなご)の庄司方に一夜の宿を頼むが、庄司の娘清姫は安珍に思いを寄せて口説くけれども、安珍は修業中の身としてこれに応じないで、翌早朝旅立ち道成寺の鐘の下に身をひそめていて、執念に狂った清姫は想いのあまり大蛇となつて日高川を泳ぎ渡り、そのあとを追って、安珍のひそむ鐘を七巻きして口から火焰を吹きかけ、安珍は清姫の恋の焰に包まれて鐘諸共焼き殺されてしまう。

それから何百年かの後新しい鐘が再建されて、その供養の日に美しい白拍子が道成寺へ参詣に来て、花の外には松ばかり、暮れそめて鐘や響くらん……。と歌い舞いながらそとそと鐘楼に近づき、「思えばこの鐘うらめしや」と叫びつゝ、矢庭に鐘の龍頭をつかんでこれを引きつりおろしその下に隠れるが、暫くして鐘は徐々に鐘楼に上り、その中から大蛇に変身して口から猛火を吐きつけるが、僧侶たちの真剣な誑経に抗し切れず、遂に日高川に飛び込んで姿を消してしまふ……。

以上が琵琶歌や能の「道成寺」、長唄の「京鹿の子道成寺」の筋書きであるが、「今昔物語」では庄司の娘というのは、実は「出

戻りの若い後家」となっていて娘というイメージはなく、常識的に考えても、若い僧の瘦所に押しつけて夜もすがら口説いたなど、純真無垢の娘では出来ない仕事であり、「娘道成寺」は「後家道成寺」とする方が適当かも知れない。

結局これは法難の物語で、「女難」を克服して仏法修業に精進することの尊とさを歌ったものではあるまいか。

ついでながら琵琶歌には関係がないが、長唄「京鹿子(きやうろこ)娘道成寺」の鹿の子とは、茶色の鹿の背中にある白い斑点模様のことだ、これに似た染め物や餅菓子などには、鹿の子何々という名がつけられている。御参考までに。

琵琶の心



琵琶の音は、聴く人の心を幽玄の世界に引き込み、たかぶらせ、震わせる。パチさばきの強弱と絃の余韻がかもしだす妙は東洋の味だ。越谷市大成町、社会社長鈴木誠治(流泉)(69)さんは、この道半世紀、弾き手としてだけでなく、数少ない製作者としても知られる。琵琶は、インド、中国を経て、奈良時代に日本に入った。歴史の重みを秘めた楽器だ。

形や絃の数などで「平家」「荒神(らく)」「盲僧」「筑前」「薩摩」などに分けられる。鈴木さんは薩摩の弾き手だ。

琵琶が好きだった父の影響で、十五のとき習いはじめた。昭和十五年には興義をきわめ「総伝」の免許を授けられた。「この年になつても、満足のいく音はなかなかでない。それだけ奥深いもの、死ぬまで修業です。」

鈴木さんは二十年前から本格的に琵琶をつくりだし、これまでに三十余面を仕上げた。ケヤキ、桑、カツラなど、何年間もねかし、あばれのなくなったところで使う。琵琶の心を知り得てはじめて、あの曲線の美事を調和が生まれる。宮内庁や音楽大学から依頼されて、音の出なくなった琵琶をよみがえらせもする。

「毎日数時間はパチを手にかけています。一日休んだら体がなまってしまふ。音は正直です。気分を如実にあらわしてしまふ。落ち着きがないと音までバラバラになる。」

夕暮れ。竹林を抜けて西日のこもる部屋でそれまで無口な琵琶が、あのたかぶりを秘めた哀調のある音をかたどりはじめ、鈴木さんの表情は、音色をいとおしむようだった。(二月二十八日朝日新聞埼玉版から転載)琵琶を膝にした鈴木氏の写真は省略)

尚これと前後して毎日新聞が掲載した「老社長、琵琶作りに情熱」越谷の鈴木さん」の写真入りの記事は大同小異につき省略する。(保)

古墳時代も「琵琶」をひいた

一鑑定で判明「奈良時代から」覆す

滋賀県守山市・服部遺跡で見つかったギターのような形をした木片が、古墳時代につくられた琵琶系統の楽器であることが、東洋楽器学研究で知られる岸部成雄東大名教授の鑑定でわかった。琵琶は、奈良時代に中国から輸入された、というのが定説だが、今回の発見はそれ以前にも琵琶のような楽器が日本に存在したことを初めて証明づけるものといえる。

「琵琶」は昨年夏、古墳時代中期の方形周溝墓（ほうけいしゅうこうぼ）のみぞから発掘された。胴の長さ六五・五cm、幅二七cm（肩幅二一cm）で、胴の幅五cm、長さ三四cmの柄がついている。当時は同様の発掘例が全然ないことから、用途がつかめず、調査員らは形から「古代のギター」と呼んでいた。

このほど研究のため服部遺跡を訪れた岸部名誉教授が鑑定したところ①胴の周辺に装束的な加工がされている、②千葉県木更津市・菅生遺跡で発掘された楽器とよく似ている。③形が琴系統の楽器とは違いうなどから「琵琶系統の楽器」という結論を出した。

岸部名誉教授は「過去の発掘例から、古代には琴系統の楽器しかないと考えていたが、

この「琵琶」が見つかったことで、いろいろな楽器が原始日本人の手で作られていたことが判明した。古代の楽器の変遷を考える上で貴重な資料になる」と話している。（三月二日朝日新聞掲載）



めざすは国際舞台

一筑前琵琶の青山さん

福岡市中央区春吉二丁目筑前琵琶保存会嶺姐蝶さんの弟子青山旭子さん（27）は、五日から東京の錦心流琵琶流派宗家鶴田錦史さん（67）のもとで錦心流琵琶を学びこのほど帰福した。日本一を目指す「武者修行」であり、筑前琵琶としては現代感覚を吸収する旅でもあった。

鶴田さんは薩摩琵琶の系譜をひきながら独自の流儀を興し、中央での活躍だけでなく、武満徹、小沢征爾氏らと海外演奏も回を重ねて、国際的に琵琶演奏家として知られる人。新樹会を主宰して後継者の育成につとめているが、昨年、東京で開かれた福岡物産展のアトラクションとして青山さんが琵琶演奏をしたのを聴き、その素質に惚れこんだ。嶺さんとは十年前から交流があり、話ほとんどん拍子で進み、今度の第一回「遊学」が実現した

もの。次回は四月の約束ができ、年に三回ぐらいの「上京げいこ」が予定されている。青山さんは七年前嶺さんの門を叩き、雨や雪の日も休むことなく昼夜二時間の琵琶修練ついにOLをやめて嶺さん方に住み込むという熱の入れかたで、めきめきと腕をあげてきた。何とか大成してほしいと願う嶺さんには鶴田さんからの話は願ってもないことだ。

鶴田さんの教育は厳しく、たびたび「覚えが悪い」としつ声がかんだ。しかし帰福した青山さんの演奏を聴いて、嶺さんの耳には教育の効果が歴然。「深みが出てきて、弦の使い方や声などにうまみ加わった」との印象を残した。あと五年の辛棒、というのが鶴田さん、嶺さんの予測で、そうなればこの「英才教育」が結実するだろうという。

青山さんは現在福岡市の音楽家今史朗氏（西日本文化賞受賞者）宅に寄寓して、譜や洋楽なども勉強し、東京遊学費捻出のためアルバイトもやっている。「琵琶ひとすじ」の青春で「結婚など考えたことがない」と笑う。

嶺さんの話 九州でナンバーワンといわれるだけでなく、中央、国際舞台へと精進してほしいと思っています。東京での勉強はそれに役立つでしょう。勿論、本人のためでもあります。筑前琵琶の古典は古典として、錦心流の現代感覚もとり入れて、いまの時代に生きる琵琶を研究する手だてにも、と願っているわけです。（二月二十三日西日本新聞から転載）写真は省略し。

武絃会・一水会多摩支部合同研修会

①一月二十三日昼小金井市福祉会館。広瀬中佐一伊藤茂良▼蓬萊山一小山羽水▼大楠公一押谷若水▼詩吟一岡吼友▼羽衣一篠宮櫻水▼桜花一石井效水▼五條橋一伊藤警水▼新撰組一村木桜柳▼龜山上皇一清水源城▼東郷元帥一坂本錦道。以上研修の後新年宴会に移り六時半散会。

②二月二十日昼同所。竜の口一石井效水▼川中島一中島瀑水▼常陸丸一小川吐水▼不詳一伊藤警水▼常盤御前一中村修水▼敦盛一杉山旗水▼龜山上皇一清水源城▼滝口入道一伊集院鼓城▼安宅の関一坂本錦道。六時半閉会

龍吟同人会の例会

山田洲鳳氏経営の東京新宿洲鳳会館に於て一月は二十三日に新年会を兼ねて琵琶、詩吟約五十名、二月は二十八日約三十名がそれぞれ集まり楽しい半日を過ごした。竜吟同人会は毎月第四日曜日午後一時から同会館に於て例会が開催されている。（会費五百円）。

大阪琵琶同好会の諸芸大会

年中行事の新春諸芸大会が一月二十九日昼奈良簡易保険保養センターと共催で開催された。当日会場に於て県PTA役員総会が開かれたあと諸芸大会に移り、湖水渡り一川村旭泉▼同一辻旭城▼屋島の誉一石橋旭▼川中島一中山鳳水▼秋風故郷の山一天津八千代諸氏の琵琶演奏の外詩吟舞、日舞、民謡、奇術

日本芸術琵琶会二月例会

若宮旭登会と合同主催で二月十一日昼東京西新宿の柏ビル六階で開催。門琵琶・伴流謡切弾法一山崎錦幽▼吉野懐古一中山旭礼、長谷川旭粹▼羅生門一青木草水▼綱館一平田旭舟▼本能寺一錦幽▼俊寛（下）一高田登水▼安宅一杉本旭童▼修善寺物語一杉山旗水▼堅田落一若宮旭登▼平家都落一雨宮映月▼日本舞踊二題一宮内女史。以上のあと小宴を開き七時散会した。

神戸夙川 楊嶽水氏宅に招かれし記

二月十一日（建国記念の日）寒さとみに和らぐ。同行三名は正午京都駅に待ち合わせ、夙川へと国鉄に乗る。已に駅には楊氏、車にて迎え居られたり。美しき庭を通り玄関より二階に案内さる。応接間には田中敷水氏と三浦蓮水師の話し声聞ゆ。

まづ主人公楊氏「勿来関」の演奏に始まる。まことに王朝時代を思い浮かべる優雅な歌い、方の中に人を庄する発声力、鏗磨のほどを視へり。続いて田中敷水氏の「小栗栖」洗練された声にてリズムを生かし、内容の表現に努め、崩れの弾法に異彩を放つ。牧南水氏「本能寺」は崩れに至り盛り上がりを見せ、スムーズに進行。木下皇水氏「敦盛」人物の表現に意を払い、声自在にして花やかなり。馬場

鴨水「白虎隊」飴谷師のレコード鑑賞にしがたい、重味と美しさ、ムードに一歩すら近寄らんと欲す。最後に三浦蓮水師の新曲「菊水の旗」謹聴、美しき弾法、正確なる発音、名文にて嚴肅な詞の一語一語を麗わしく表現され多々教示されしなり。終って詩吟民謡への余興に一転し、親しみ更に加う。この間老母さま終始傍らにて聴きありし、まことにうれしき限り。

かく夫々独自の芸風を発表し合ひし喜びを心に抱きつつ階下お座敷にて山海の珍味を頂く。琵琶談義に時をも忘れ、七時すぎ散会、玄関にて奥さんのお見送りを忝うし帰途に向へり。（馬場鴨水記）

京都琵琶協会二月定例茶話会

暦の上の「立春」は酷寒にふるえ上ったが今日はまた三月下旬の陽気十五度という暖かさの二月十三日（日）昼一時から会員矢吹旭美津女史宅で開催。平井春嶺、徳師旭富、荒木旭媛、古谷寛水、牧南水、山岡旭清、安住旭康、矢吹旭美津、梅原旭濤、田中鵬水、戸倉旭嶺、に伊丹市の浅見汀水氏が来賓出席。

▼小督一山岡▼本能寺一牧▼彰義隊一平井▼鉢の木一浅見▼道成寺一植村。以上演奏のあと六月五日開催の協会春季演奏会に就て意見交換などをし附近のレストランで夕食を共にして七時半散会した。